



双塔

カトリック新潟教会

2017年5月
No. 348

善い羊飼い

協力司祭 鎌田耕一郎



(イエスの面影) イエスを愛する人々が、逃れることの出来ない、一つの誘惑がある。それは、出来るなら主の面影を知りたいということである。マグダラの罪の女が、会食者たちの中ですぐにイエスを認めたのだから、輝くように美しかったという推理も、イエスが捕えられるとき、「一同を圧するほど目立つものもない。生命のつくり手は、ひげをはやしたこのナザレ人の一人であり、みわけがつかない。ユダが指し示さねばならなかったのだから」(モーリヤック)というのも、あまりあてにならない。

福音書は、この点について、全く手がかりを与えていないからである。クロードルが「恐ろしい真実性」と評した、トリノの聖骸布を除けば、何の手がかりもないのであり、多分、唯一の正しい意見は、「イエスのおからだの像は私たちに知られていない」(聖ポリカルポ)であろう。

それにもかかわらず、多くの芸術家は、その信仰の目でキリスト像を描き、刻み続けてきた。ベロニカの美しい物語のように、主は自分を愛するものの心に、その姿を記されるのであるから、それらの作品は、信仰の心のキャンバスに映じたキリストである。私たちも「人となった神イエス」のイメージを心に描く。その時、誰もが思い描くのは「善い羊飼い」としての姿であろう。それは、カタコンブの時代から、現代に至るまで、人々の心の中に深く根をおろしている。

(羊飼いの声) 羊飼いは、羊に水をやるときや、呼び集めるとき鋭い叫び声をあげた。羊たちは、その声を聞き違えなかった。羊飼いは羊と起居を共にし、羊を愛し、羊もその主人を慕った。イエスの言葉について、ルナンが「この言葉には一種やさしくも恐るべきひらめきがあり、敢えて言えば、其処に神の力が現れている。それによって、これらの言葉は全体の中から区別され、容易に識別し得るほどである」といったのは正しい。また、「彼が口にする言葉には、かならず特別な響きがある。その語調や抑揚は、いまでも感知できるものなのである」(モーリヤック)。

「私は自分の羊を知っており、私の羊もまた私を知っている」(ヨハネ 10・14)。この内面的な、神秘的な、相互の「知っている」ことから、真の信仰の活力がほとぼしり出るのであり、やがては「一つの群れ、ひとりの牧者」(ヨハネ 10・16)となり、永遠の牧場に導かれるのである。

私たちは烈しい嵐の野や、乾ききった砂漠の中で、羊たちの魂の救いのために呼びかける「善い羊飼い」の、あの鋭い声に耳を傾けなければならない。

そよかせ便り

■ 復活の聖なる徹夜祭・入信の秘跡 ---- 4月15日(土) 19:00 ----

まだ肌寒さが残る聖土曜日の夕刻。聖堂正面玄関内には光の祭儀のためのしつらいが整えられ、内陣近くでは受洗予定者が主任司祭とともに入信の儀の流れや立ち位置などを確認、これから始まる祭儀に備えた。

午後7時。聖堂内の照明が落とされ、暗闇の中で炭火が起こされ、司教様はその火を祝別。続いて、「復活のろうそく」が司教様によって祝別され、会衆は復活のろうそくの火を各自の手にしたろうそくに受けた。続いて復活賛歌が司教様の先唱で歌われ、旧約聖書の朗読が続いた。第7の朗読とそれに続く答唱詩編、祈願が終わると、カンパネッラ（侍者の持つ小鈴）や聖堂の鐘が響く中、栄光の賛歌が歌われ、集会祈願、使徒書の朗読が続いた。これにより、イスラエルの民の歴史と伝統（旧約）の礎の上に、私たちの主イエス・キリストによって新約の神の民の歩みが続いていることが典礼においてもあらわされている。

この荘厳な祭儀の中で、9名の方々が信仰を宣言し、洗礼と堅信の秘跡が司教様によって授けられた。その後会衆全体も洗礼の約束の更新を行い、祝福されたばかりの洗礼水で灌水を受けた。9名もの受洗は新潟教会ではここ何年もなかったことで、司式された司教様も思わず「長かった」と漏らしておられた。

菊地司教様の説教から（全文は「司教の日記」参照）

- * ご復活のお祝いとは、キリストにおいて新しいのちに生きるものとして、その死と復活にも与ろうとすること。
- * 求められているのは、安住の地にとどまることではなく、新たな挑戦へと立ち向かっていくこと、そして苦難の中に主への揺るぎない信仰を持ちながら立ち向かって歩み続けること。
- * いつくしみ深くあることや、すべての人を排除しないなどということは、現代社会にあって、何をナイーブで愚かなことを言っているのだという嘲笑にさらされる価値観や行動ではないかと感じることがある。そこには、クリスチャンは夢見る理想主義者だと非難されるよりは、黙っている方が無難だと思わせる、すさまじい負の力がある。
- * 暗闇の中で輝くろうそくの光は、復活された主がすべての人の希望の光であることの象徴であり、復活のろうそくから各自のろうそくに火をいただいたのは、私たちも同じようにその光を輝かせる使命を受け継いだということ。受け継いだ使命を勇気をもって果たしましょう。

■ 復活の主日 ミサと祝賀会 ---- 4月16日(日) 9:30 ----

やっと春めてきた復活の主日。やはり復活祭と春の訪れは近いものがあると感じさせる日差しの中、9時半のミサ前には多くの人が集まった。

この日も洗礼の約束の更新と灌水が行われ、ミサの終わりには前日までに準備された復活の卵が祝別されて会衆に配られた。なお、これとは別に販売用の卵も準備され、ミサ後に上越の聖クララ会修道院製のクッキーとともに販売され、どちらも見事完売となった。

ミサ後はセンター2階ホールで受洗者を囲んで祝賀会。司教様、ラウール神父様の挨拶に続き、ラウール神父様がユーモアを交えながら受洗者を紹介。鎌田神父様の発声で乾杯したのち、総務部の皆さんが前日から仕込みをしたハヤシライスがふるまわれ、青年たちや英語ミサに参加している方々の余興がお祝いに花を添えた。締めくくり全員で「キリストの平和」を合唱、司教様の祝福をいただいて散会した。

■ ロレンゾ神父様の祝賀会 ---- 4月23日(日) 9:30 ミサ後----

ホセ・ルイス・グレゴリオ・ロレンゾ神父様が4月23日（神のいつくしみの主日）をもって新潟教会協力司祭として着任された。この日の9時半のミサはロレンゾ神父様が司式。ミサに続いてセンター1階で歓迎の茶話会が催された。

ロレンゾ神父様の主な務めは新潟教区における外国人司牧。そのため、日曜日は新発田教会や浦佐の国際大学などでの英語ミサその他の集まりのため不在になるとのこと。時には山形や佐渡へ行かれることも。そのかわり、週日には新潟教会におられ、ゆるしの秘跡や勉強会など担当して下さるとの紹介があった。

なお、今年8月から12月まで、所属する神言修道会がローマで開催するプログラムに参加されることがすでに決まっているため、「来てすぐに長い間留守にすることになり、申し訳ありません。ここへの着任が決まる前に決まっていたことなので、ご了解ください」と、本当に申し訳なさそうに話された。

茶話会の間には会場を一巡され、参加者と言葉を交わしておられた

カトリック新潟教会 月刊「双塔」 毎月1回 最終日曜日発行 編集・発行 / カトリック新潟教会 教会運営委員会 広報部
〒951-8106 新潟市中央区東大畑通一番町 656 TEL : 025-222-5024 FAX : 025-222-5054